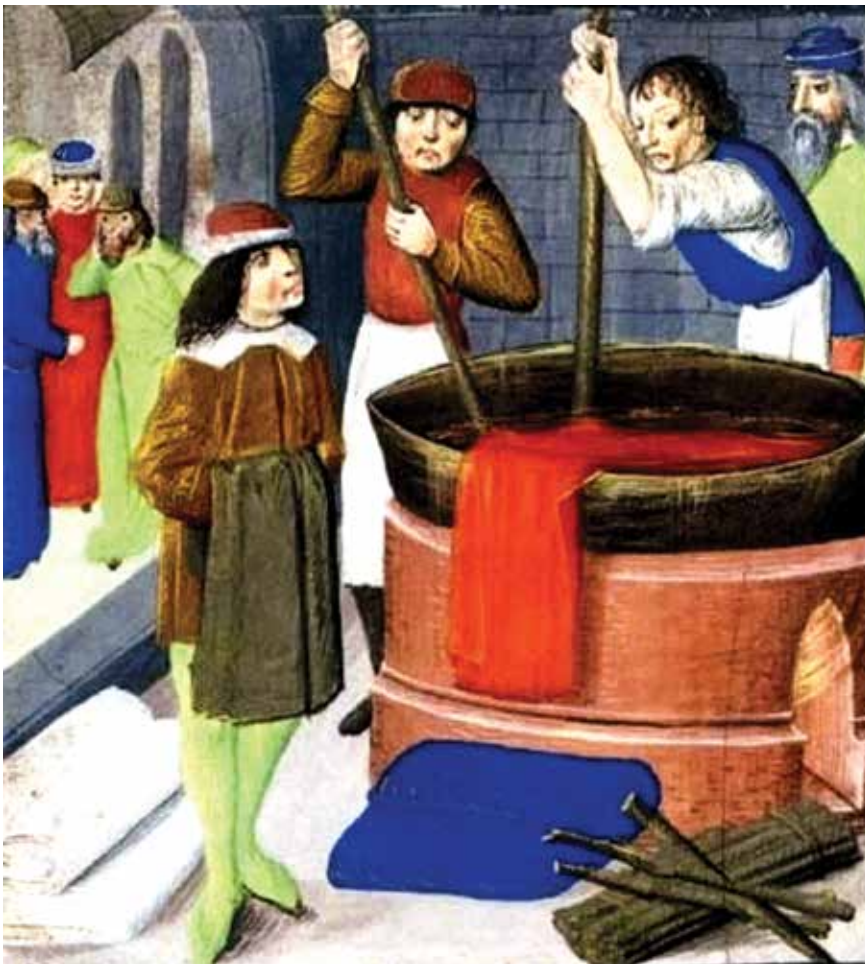


イズミラ・クリエヴァ
歴史博士

アゼルバイジャンの天然染料 - 人間への自然からの贈り物



織物の染色の工程。古代ヨーロッパの彫刻での絵

アゼルバイジャンは豊かな古代文化のある国だ。大昔から、国民芸術の種類の多様性で有名であった。ギリシャの歴史と地理学者のストラボンは、コーカサスのアルバニアには26の部族がおり、それは発掘調査で見つかった埋葬の異なるタイプによって証明されると記している。墓地ではウールや麻や綿の布の遺跡が発見され、それはアルバニアのほぼすべての部族に織物業の発展を示している。

世紀の終わりまで使用された
天然染料 - アカネ染色



農業と畜産業の始まりにしたがい、人々は徐々にウールの製織改善しながら、植物繊維を使用するようになった。素材は天然染料によって塗られ、飾られていた。これらの取得の為には石器時代の人々は芽、茎、樹皮や植物の葉（1）を使用していた。古代人の色ついた服はただ着るだけでなく、外の脅威からの保護の象徴でもあった。と言って、その時代にて衣類はお守りであり、それは裸で、脆弱な人間の体を邪悪な力からの保護に対して、外の世界の侵略に障壁だった。（2、頁14）考古学者の計算によれば、遠い昔から—3万年前—染色が人類に知られていた。我々の祖先は、手段を見つけることに非常

に創造的であり、虹が消えるかのように布や糸の色のパレットを多様化していた。染めの技術は文明の夜明けにアゼルバイジャンで知られていた。ナヒチェヴァンでキュル・テペで発掘調査中に赤いペンキのついた石の跡とモルタル（紀元前4～3世紀）が発見された。ヘロドトスは、コーカサスの人々の間での草木染の調理について著書の『歴史』にて次のように述べている。「その森の木葉は水と混合して、出来た組成を使って衣服に模様を描くのだ。この模様は洗い流されていなく、布、特にウールに残るままとなり、ずっと昔から縫われたかのような。VII世紀年代記者、モーセ・カランカトイスキは『アルアン国の歴史』という本にアゼルバイジャンの北部に様々な色や色合いのシルクが生産されていると書いている。（3、頁87）

10世紀関連の『アル・アラム・フドウド』原稿においてアゼルバイジャンの都市は、ムガンを含み、そのチュヴァルという袋や色々な絨毯で有名で、ナクチェワーン市、ホイ市及びサルマス市はその

織物の染色。古代日本の彫刻に絵



ジリ、絨毯、ベルトや他の布製品で、アルダビール市とシルヴァン市はシルクとウールで有名であった（4、頁39）。アルバニア時代のマスターは染色プロセスをよく知り、研究者が言うには、によると、彼らは繊細な布の織り方のみならず、色を塗ったり、様々な画を書いたりすることができていたらしい。アゼルバイジャン芸術の最も重要な古代の枝の一つとしては刺繍である。刺繍は19世紀にてよく普及されており、アゼルバイジャンのほぼすべての都市・地域で広範な需要をみせていた。アゼルバイジャンの刺繍は美術工芸の一つの種類であり、アゼルバイジャンの女性の役割が目立つ。19世紀始



スマフ アゼルバイジャンで
紫色の源



サフランの花



サフランの「野菜ストリン
グ」が”耐性塗料の源として



ヘナ - 依然として不可欠な
化粧品着色剤

まり頃の女性詩人、フル
シュド・バヌ・ナタヴァ
ンは暇な時に刺繍をやっ
ていたらしい。彼女が作
ったビーズ刺繍の水ギセ
ル用ケースは非常に美し
く、その色合いは印象的
である。

アゼルバイジャンの12世
紀の偉大な詩人であるニ
ザミ・ギャンジャビは次
のように書いた。「我の
家に夜の糸で色彩豊かな
布を創る」。

考古学・民族学研究所が
2010年にアグス地域に於
いて実施した考古学的発
掘中に、巨大セラミック
器及び燥天然染料の残り
がある入れ物が発見され
た。それらは18世紀終わ
り～19世紀初期にさかの
ぼる。

19世紀の半ばまでは糸の
染色工程にて「自然から
寄贈された絵具」と呼ば
れた天然染料のみ使用さ
れていた。染料の源は植
物、鉱物、そして昆虫さ
えだった。アゼルバイジ
ャンの名人は何世紀にわ
たって天然染料としてコ
チニール、ウコン属（ア
ゼルバイジャン語でサル
キョーク）、サフラン、
クルミ、ミズキ、ザクロ
等々を使用していた。天
然染料は、化学薬品と違
って、ウオール糸の線維

性を破壊せず、色の輝き
と彩を与える。(5, 頁36)
どの色は、自然から得る
ことが可能で、さらに、
人間は自然と調和して生
きていき、その色々を見
て本当の喜びを味わえる
だろう。それは地方のど
の村家に入ってみたら、
すぐ分かることだろう。
天然染料の取得は非常に
複雑で繊細な工程である
。使用される植物の成熟
度や、温度や、染料の量
や、水の組成や、カルシ
ウム塩の濃度などのあら
ゆる詳細が重要である。
工程の外からの簡単性
や素人らしさにかかわら
ず、「ボヤグチ」という
民族染物業者は、富、明
るさ、耐久性及び色彩の
多様性で驚くべきの結果
を達成した。

動物由来の染料は安定し
た最古のものと考えられ
ていた。貝紫、アカネ
属、コチニールが最も一
般的であった。最も古い
のは貝紫色である。それ
は、シェキやシャマヒの
「グルムズボジャイ」と
アゼルバイジャン語で呼
ばれる貝から作り、赤や
紫のさまざまな色彩が出
来ていた。貝紫の色は非
常に安定で、常に高く評
価されたものである。ア
ゼルバイジャンの絨毯研

究者、ケリモフが次のように記していた。「アゼルバイジャン領土内に「グルムズ」という赤虫が現れ、樗葉で飼育することが信頼できる情報源から知られている。カーペット織工は、それらの虫を染料を取得し、ウオールを塗るために使用するようになった。「ジャバラハチ」という絨毯名人は、それらで縫われた他の布をも染めていた。筆者は、赤色が何世紀にわたってそのワームか染色根のアカネで得られていたものと指摘している。天然のカラーパレットの最も稀で高価なのは

紫である。それは一年にはたった一回に、一ヶ月にわたって調理することができる。すなわち、オークカイガラムシが特別な分泌物を排出する期間に限るのである。有名な雄弁家と政治家キケロは、彼の卓越した奉仕の認識の象徴として紫色の服を着ていたという言葉及があります。エジプトの女王クレオパトラはその美しさと豊かさのためだけでなく、愚かさでも知られており、かつて船の帆を紫に染めるように命じたらしい。紫は象牙や羊皮紙を染めるように用いられた。紫でイ

ンクも生産されていた。貝で染めることができる技術の知識は海岸沿いの村の唯一の少数の住民が保存している。

これに関連して注意すべきことを非常に困難と。したがって、染色業では植物由来の染料が使い始めた。アゼルバイジャンの植物相でも様々な発色性ある植物に極めて豊かである。(1)

古来は、布を赤っぽい色への染色工程にてアカネの根やマホガニーやブラジルボクが使用された。染料は多年の草本植物、アカネの根から作られていた。それは、コーヒー

カーペット糸の染色





とシンコナ木と関係性がある。ホテルマレナとは、多年生低木で、そのルーツが発色特性を持つ。アゼルバイジャンの職人はそのことを「ボヤグ」と呼ぶ。(8、頁66、72-74)。18世紀～19世紀に渡るアゼルバイジャンの染色業はもはや独立した専門的な工芸となり、それは常に製品の競争力を確保するための特別な秘密を保っている。染料の製造の工芸品は手作業に基づいていた。また、職人の多くが家族の伝統にしたがい、父親の職業を継承している。サンモーリスは

「彼らの工芸品の製品よりも美しいものはないのではないのか」と書いている。D. M. ロシンスキはシェキの染料の家について次のように説明する。「プライベートスタジオではマスター自身、その家族、従業員、二人の雇い人と一人の少年が働いている」。(9、頁94)染料家は「ボヤグハナ」といわれ、18世紀の始まりからアゼルバイジャンアゼルバイジャンの多くの町や村にあった。通常は染料人がそれらのワークショップを絨毯の集中生産のところに開け、そこで大量に製品を売ること

ができていた。我々の祖先は、太陽の色彩を取得すると決まったら、そのために20以上の植物を使用していたらしい。マメ科の低木や矮小低木の中では、特別な染料法の種類がある。(10、頁18)黄色と一緒に茶色は、アルダーの樹皮、葉や樹液から得られた。アゼルバイジャンの南の地池であるレンコランでは黄色を取得するためにサフラン、ウコン属、ウルシ、ダイオウ、カレー、タマネギ皮、フストウック等々が使われていた。タマネギの皮のブロス



シェキにおいてキャラガイのために用いられていた。(6) シェマヒ州では黄色の染料を得るために黄ばん桑の葉、樹皮、野生リンゴとタマネギの皮を使用していた。黒色の場合は新鮮なクルミ・シェル、ザクロの皮、クルミやカシの樹皮を使用していた。(1、頁32) ヘナといったら、それはオレンジ色の古い染料である。ところで、緑の色を得るためにはインディゴ(青)と黄色の色素の異なる種類を用いていた。(11、頁30) セージとブドウの葉からは黄色、淡褐色と緑がかった灰色を

得る。ユーカリからは赤、黄色はマルメロ、アーモンド、ブラックベリー、栗、ザクロ、カモミール、オーク樹皮、タマネギ、サフランから出来る。茶色の様々な色彩はクルミとタイムから取れる。全く同一の天然染料は、糸や布、地元の水の特性、染料工程にあたって使われる、固定試薬を含み、追加の試薬に応じて異なる色彩を与えることが可能である。植物についてちょっとした「わざ」を知っていたら、非常に興味深い実験ができそう。例えば、黄色の色

をみてみよう。押しつぶされたザクロの皮を水牛のミルクと混ぜ、レモン汁を少し追加してみたなら、色が鮮やかな緑に変わってくる。レモン汁はもう少し加えたら、茶色になる。しかし、ザクロ皮の割合をミルクに当てつけて乱したら、オレンジ色の染料ができる。染色工程に際しては、当然のことながらも、天然の色のウオール、茶色、ベージュ、ゴールド、黄色などがよく使用されていた。ウオールの白を取得するために特別にアブシェロン半島に採掘される石、「ガルガ・ドゥ

ズ」を使用して漂白していたらしい。(9、頁96)
色素といえば、我々の注目はすぐファブリック、絨毯、刺繍糸に関連付けられていくのではないだろうか。そして、何かの理由で、日々天然染料を必要とする美しさのオブジェクトが迂回されるだろう。それは、女性の美しであろう。なぜかと言うと、「美は犠牲を必要とする」と全ての女性が口をそろえて言うのではないのか。古代から現代に至って女性に完成のために努力をやめずいるのだ。

19世紀～20世紀におけるアゼルバイジャンのすべての地域から少女や女性性は化粧品として自然が与えたものを使っていたのだ。それはヘナ、アンチモン、タイムなどを用い、女性たちはつま先まで長める自分の髪を染めていたらしい。

スキンケアの基礎は、バラの花びらをくみ出すオリーブ油またはごま油を加えたミルクから調製した。ルージュ及び口紅はもっぱらアカネ、「ギャラブ」といったバラの水で作られていた。

筆者はある時アゼルバイジャンの北のバラカン地域での結婚式を訪問することがあった。そこでは、寛大さと豊富さが感じられた。草は人の高さのほどだった。ポプラは、超高層ビルかのように高くあった。道路にそってクルミの「柵」が太陽まで延びるかのようだった。バラカンからイスマイル、ザガタラ、ガフ、シェキ、オグズ、ガバラ・ハイウェイまでは随時このような緑のトンネルに入る。この地域の美人たちは、爪と紙はへ

絨毯織りで使用染め糸



ナでなく、クルミの皮をカバーする汁で染めるのだ。絨毯用の糸もこのように染められている。地元の女性の美しさ・勇気について伝説もあるのだ。

そして、もう一つの例。アゼルバイジャンのダッシュキャサン地域の牧草地には「チュプ」といわれる草が生える。それは、小さく、低いブッシュだ。夏になると、家畜のブリーダーは山の牧草地に群れを帰らせるころにその草が最初の小さな白い花卉を開く。少女や羊飼いや若い妻たちはそれらを見て大いに喜ぶ。女性たちは午前中牛を搾乳した後、女性は牧草地まで群れを追いかける。家に帰ってきたら、まるでサロンにも行ったかのように、女性は非常に魅力的で、頬にかわいいほくろを敢えて見せびらかしながら、上機嫌でいる。たった一つのほくろを作れるように、花の花を引き出し、その核心に圧力をかけるだけ結構なのである。すぐに青みがかかった液滴が出てき、それはほくろを描くのに十分だ。液体は瞬時に乾くとベルベットのような黒になってしまう。

アゼルバイジャンの女性は大昔から人口的なほくろと少し細長い刻み目を描いていたものである。有名な歌手、ラシード・ベイブトフが歌うように「頬にはほくろ、眉毛が新月ごとし」。

そして最後には、高品質の染料はアゼルバイジャン絨毯や織物の古典的、芸術的な特徴性を決定させる、永続的な基盤であった。

参考文献

1. V.A. ペトロフ『アゼルバイジャンの植物染料』、バクー、1940年
2. A. シャフェイエフ、『過去の影 - 邪悪な力からの保護』、モスクワ、2010年
3. A. I. サプリン、『歴史への旅』、レニングラド、1973年
4. レキモフ・リャティフ『アゼルバイジャン絨毯』、第2巻、バクー、1983
5. M.D. イサイエフ『ザカフカース領域のカーペット製造』、トビリシ、1932
6. V.A. チラグザデ『古代シルクの土地』、バクー、1988.
7. 『トランスコーカシアの家内工業のニーズ』、1896.
8. S. タリヴェルディイ

エフ『心がけたら絹になる』、バクー、2004.

9. D.M. ロシンスキ、『1894年度ヌヒ郡の養蚕と製糸業』、トビリシ、1896.

10. V. カンディンスキ『色の魔法の世界』、モスクワ、2006.

11. M.A. モシュコヴァ『民俗芸術、伝統、学校』、モスクワ、1983.

イラスト一覧

1. 布の染色。古代日本の版画。
2. 布の染色。古代ヨーロッパの彫刻。
3. ウルシ - アゼルバイジャンにおけるマゼンタ源。
4. アカネ染め - 19世紀の終わりまでに使用した天然染料
5. サフランの花
6. サフランの植物の「糸」 - 耐性染料の源。
7. ヘナ - 依然として不可欠な化粧品着色剤
8. サルキョーク (ウコン)
9. カーペット用の糸の染色。
10. 染め色の乾燥工程 ●